

久留米市上津町向野二二二八
久留米工業学園
短期大学同窓会

発足にあたり

會長 山口 進



今回、はからずも皆様方の推挙により、本校同窓会会長に就任いたしました。

私の無上の光榮とするところでありませう。私は、そのついでないのでご辞退申す口説きおとされ、お引き受けいたしました。就任しました以上、私の能力の範囲で最善の努力をいたします。はなはだ僣越ながら一生、ご挨拶申し上げます。

に朋はなく、ただ君子にのみすなわちこれあり」。この意味において、なんら利害關係をもたず、ただ母校愛によつてのみ成立した本同窓会も、真の君子の交りであり、真の朋をえたものであると思います。

開校後七年にして、卒業生、二千二百名に及ぶ多数

実は、ごく最近、数名の者が集り「我短大卒業生が相当数になったのに、今だにもって同窓会が発足されないのは残念ではないか、何とかな足したい」。という意向で会合を開く事になりました。ふだんはお互、多忙の身体ですが、せめて年に一度や二度集って旧友を温めたのもものです。そうした趣旨でお願いしたところ多数と賛同していただき深く喜びとする次第です。我々、その職業や地位により、種々の会合をもつ機会が多いようですが直接間接的利害関係が含まれていないようです。それ

を要するようになり、今回、同窓会が発足されましたことは、私達卒業生はもとより本校関係者の望んでいたことであり、この上ない喜びであります。これひとえに皆様方の協力のたまものです。厚くお礼申し上げます。

省りますと、私達一学生が本校を去り、十年に近しい歳月が流れ、雑木林に囲まれた新開地であつた当地が、時代の流れと共に九州縦断道路の中心となり、又筑後地区の自動車工場や住宅地が増設され、昔日の面影を、本校も大分変えました。高良山は巨大な姿を四

同窓会の

発足にあつて

鹿子島 晋五

短期大学同窓会

見せてくれます。私達は、法則や科学と共にこの世界を作っていることを忘れがちであつたように思われます。自然は美しい。その美しさは美しく見せようとして美しいのではなく、飾らないありのままの姿であることに本物の美しさを感じさせます。我々の母校は、その自然の中でいつまでも美しく懐かしいものです。

同窓会は、未知の間柄の人でも、学生時代の思い出話を通じて百年の知己を得

越えてゆく際、お互に助け合い励まし合つてゆく一つの方法としてこの会を大いに利用し今後の発展と繁栄にお役に立てて頂ければ幸いです。

我々は母校のますます発展せんことを祈ると共に、本同窓会のいよいよ盛大に赴かんことをひとえに希望する次第です。はなはだ簡単ながら、紙上をもつて発会のご挨拶を申し上げます。

(久留米工業高校)

『同窓会誌』の

発刊を祝つて

久留米工業短大

学長 佐藤 博



待望の春が短大の同窓会誌が発刊されたことはご同慶の至りです。昭和四十一年の春に、自動車工業科、定員二百名でスタートしたのが短大も、四十三年には五百名に増員し、つづいて四十五年には、定員五十名の専攻科ができ、さらに今四十八年の春に、日本の短大では唯一の設備工業科、とです。

さて私は、小学校から大学までの長い学校生活の間いつもよい友だちに恵まれて、各学校の同窓会を通して、これらの友人と長年の交り続けていることを大へんありがたく思っています。

昭和十二年の春、私は九州大学から二年間のドイツ

同窓会の

発足にあつて

鹿子島 晋五

久留米工科大学短期大学
風光絶佳の地、高良台
一隅に開学したのは、七
年前の昭和四十一年四月で
第一回の卒業生約三
十名を、四十三年三月
に、現代社会の特質を最もよ
く表現するものに「疎外」
という言葉があります。歴
史的にまた社会的心理的に
疎外された自己を回復し、

社会に送り出して以来、昭和四十四年の定員増、四五年の専攻科設置を含め、風満帆の勢いで発展を続今日に至りました。すでに二千名をこえる卒業生全国の自動車産業界の中心技術者として期待以上の績と成果を挙げつつある日、本来あるべき同窓会に、本来的に急がれていたと準備委員諸氏の無償の力、今年度より待望の同窓会が初々しく誕生すること

本来の自己を如何にして取り戻すかは、一見迂遠の課題に見えて実は人間にとって回避すべからざる根源的な要請なのです。このような要請にどう応えるかは個人的には多様な方法があるでしょうが、一人のグラジエット (Graduate) としては母校の同窓会活動に参加することによって自己を革新し、疎外感を克服する道を選ばなければならないと思います。人間は、社会的な動物であるといわれ

字を命ぜられて、日本郵の箱根丸で渡欧したのでが、この船の中で、国際勸業會議に政府側代表として出かけていた、中学時代同窓生、大橋武夫氏に出会い、マルセイユまで一カ半の長い航海を共にしたのでした。	しかしその後は同氏と機会もなく、第二次大戦さしはさんで、三十年も年月がすぎたのですが、わ十一年の秋になって、短大の二級自動車整備士養成機関として、運輸省の定をうけようとした時、よく大橋氏が運輸大臣を	していたので、早速、挨拶に認可が下り、ほんとに嬉しく思ったことでした。	私の後の壁には、 ・認定書（認定番号二級第4号） ・学校法人 久留米工業学校理事長 大山勘治 殿	
昭和41年9月10日付けで申請のあった学校法人久留米工業学園短大は自動車整備士技能検定規則、第18条第1項第6号の大学として認定する。	昭和41年12月7日 運輸大臣 大橋武夫 という認定書が、かけてあるが、これを見るたびに、当時のことを思いだして、同窓の友だちは、ほんとうによいものだなーと感じるのです。	私は昨年の卒業記念アルバムに「友情は喜びを倍にし、憂いを半分にする」との、ドイツの詩人シラーの言葉を書きそえました。学校生活で大事なことは、学問、技術の修得に加えて、よい友だちをつくることです。わが短大の同窓会が、ますます成長して、会員相互の連けい親睦がよく図られ、母校発展のための、よい働きがなされるよう願っています。	してやみません。	

会を、技術練磨

情報交換の場

江島義治

「仁」という字は「イ」と「ニ」から出来ていて「二人の人間関係」を規定するモラルを表わすものと考えてよいようです。自己に自己意識をもたらずものは自己自身ではなくて他者の意識であり、しかも、人間が相互に他者の眼差しの対象となることといわゆる「対地存在」と化すところに疎外の本質があるとすれば、疎外から自己を回復する道はこの二律背反の前に完全に閉ざされているように見え

私 は自動車 の板金、塗装 を業として います。最近 の時代 の変化 は大変 なもので す。私が 開業 した昭和三十 年頃 は、のんびり した もの でした。車 の台数 も少なく

分間 にあつて いました が、最近 は理論 に基づいた 整備 に 変り、一ミリの 誤差 も許され ない、洗練 された 技術 を要求 される ように なりま した。

会を、技術練磨 情報交換の場

江 島 義 治
(第三回卒業)

ます。人間を取り囲む環境は不条理そのものです。人生は挫折の連続です。しかし、このような絶望的な人間の条件を克服せんとする血みどろな戦いの中に、人間の尊厳性を見る思いがします。

同窓会活動の中に人間の尊厳性を見出せるなどと、大仰なことを言うつもりは毛頭ありませんが、一つの大学の伝統に育ぐまれた人間関係の中から、横縫の友情を深化させることによって、自己疎外の危機を克服できると信じます。もちろん、行手には矛盾と不条理に満ちた不毛の荒野が無限に広がっているかも知れません。青年の情熱と覇気だけが、この荒野を突破して、豊饒の沃地へと導くことを可能にするでしょう。在来同窓会の多くが会員とは無縁な、形骸化した組織に終わっている事実を直視して「組織はあくまでもその構成員のためのものである」という原点に立ち

事故件数もかぞえるほどでしたが、池田首相の所得倍増論以来、日本は高度成長設備投資、公害問題と、戦国時代の如き変遷を重ねて来ました。自動車業界も、自動車の国内保有台数が飽和状態となり、車の性能においても飛躍的な向上を示したことはご存知の通りです。

私は、今日の自動車業界が徳川政権時代のように思われるのです。戦国時代を勝ち抜き、江戸幕府を開きました。我々自動車業界に勤く者も、昭和三十七年頃が戦国時代のようにでしたが今では競争と力の時代は終り、平和と安寧な社会造りの時代になったと思うのです。

車の性能アップや、高速道路の建設は、平和・安寧の意味からすれば逆ロープでしょうが、その条件も含めて、今日の自動車産業は元禄時代の如き円熟期にあります。今までの自動車整備は経験による技術で充

私も、かかろる意義を述べませんが感じとり、当短大の学生に加わった老骨であります。しかし、職業と家庭と学問と三身一体のスーパーマン的活動は不可能でしたが、私なりに自動車が何であるか自動車を理解するためにはいかなる知識が必要であるかは理解できつつあります。

かろうじて当短大を卒業した今、省りみずと二年間の学生生活が短く感じられます。同級生の名前を覚える事もほとんどできませんでした。昼間の学生諸君に至っては一面識もないまま卒業しました。

この事は私のみならず皆さんが、友人学友という感じがなまま社会に巣立つたのではないでしようか。先輩、後輩の接触もないまま、大いなる社会の中に消えていったように思われ、何か寂しい気がしてなりません。

今日、短大当局のお骨折りで同窓会の発足がなされ

同窓会役員

會長	一回	山口進
副會長	一回	古賀保彦
常任幹事	一回	大鶴道則
幹事	一回	井上利明
幹事	一回	高柳正秋
幹事	一回	中村金次
幹事	一回	永江龍幸
幹事	一回	森部等
幹事	一回	藤木礼作
監查	一回	糸永喬
監查	一回	川村隆記
監查	一回	北島良清
會計	一回	田代文雄
會計	一回	佐藤光男
會計	一回	綾垣通正

